

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1291200853		
法人名	株式会社みくに		
事業所名	グループホームみくに恵の園		
所在地	〒271-0061 千葉県松戸市栄町西5-1322-4		
自己評価作成日	令和8年2月25日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://gh-mikuni.com/grouphome/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 NPO 共生		
所在地	千葉県習志野市東習志野3-11-15		
訪問調査日	令和8年3月9日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

グループホームみくに恵みの園では、ご本人様がこれまで大切にしてきた生活や価値観を尊重し、安心してその人らしい生活が続けられるよう支援することを大切にしています。 特にご家族様との連携を重視しており、面会時には最近のご様子を丁寧にお伝えするとともに、ご家族様が感じている不安やご要望を職員が積極的にお聞きし、日々のケアに反映できるよう心掛けています。 また、入居者様の自立度を活かし、できることや得意なことを大切にしています。食事の準備や簡単な家事など、日常生活の中で役割を持って参加していただくことで、「自分も役に立っている」という気持ちや生活の張り合いにつながるよう支援しています。
--

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当該事業所は、同一法人内で3か所目のグループホームとして同一敷地内に開設されており、既存事業所の運営ノウハウを共有できる体制が整っている。敷地内には保育園も設けられ、職員の子育て支援に配慮した働きやすい環境づくりが図られている。利用者調査では家族・本人ともに事業所への信頼や満足度が高い結果が示されており、日々の丁寧なケアの積み重ねがうかがえる。比較的軽度の利用者が多い特性を踏まえ、これまでの生活の延長として身体能力を活かしながら役割を持ち、互いに協力し合う大きな家族のような生活が営まれている。また、職員間の自発的な意見交換を通して現場の気づきが共有され、日々のケアや運営の改善につなげられている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー) です。]

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅰ.理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	管理層が理念を理解し、現場職員へ伝えている。しかし、もっと伝えて、実践につなげていく必要がある。介護職員の中では実践できている部分とそうでない部分がある。介護方針「安全と清潔を与える介護」「生きがいづくりの介護」「できることはして頂く介護」を一人一人はおおむね理解し実践している	理念は、利用者の自立支援とこれまでの生活の継続を重視している。比較的介護度が軽度の利用者が多いことから、身体能力を活かしながら役割を持ち、大きな家族のように互いに協力して生活できるよう支援が行われている。こうした理念は職員間で共有され、日々のケアの中で実践されている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している。	コロナ禍が続いたため、地域との交流や行事への参加ができなかった。現在は散歩に出かけるときに地域の方と挨拶を交わす交流を行っている。コロナが落ち着いてきて、徐々にボランティアの受け入れを再開している。	地域との交流として、開設間もないことから施設見学を積極的に受け入れている。また、併設する保育園では0歳から2歳児までの保育が行われており、職員の子育て支援を目的として設立されている。今後は利用者と園児とのふれあいの機会を設けることも検討しており、さらに専門性を活かした福祉相談の実施など、地域への貢献に向けた取り組みも考えられている。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議を通して、みくにのケアの考え方や介助方法を地域代表の方々や他の介護事業書にお伝えする機会がある。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では運営状況、行事報告、事故報告等の取り組みを報告している。地域の方や他の事業所の取り組みを参考にケアやサービスの参考にしている。	運営推進会議は系列の三事業所合同で開催されている。一回につき一時間半の時間を確保し、各事業所から三十分ずつ報告を行う形式がとられている。他拠点の事例を参考にした転倒防止対策の検討や、センサーマットの活用に関する専門的な助言を得るなど、運営の質の向上に活かされている。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる。	運営推進会議に市の担当の方に参加していただき、現状をお伝えしている。	同一敷地内の3事業所が連携した運営が行われており、松戸市の指導監査課や介護保険課とは法人全体での連携体制が築かれている。行政からの情報提供や市の連絡会への参加を通して情報共有が行われ、運営に役立つ助言を受けるなど、行政との円滑なコミュニケーションが図られている。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	現在、玄関の施錠や転倒予防のためのセンサーマットの使用を必要最低限の範囲では行っている。それ以外のご利用者様の行動を制限する対応はしていない。なお、身体拘束虐待廃止検討委員会を設置し、職員が参加する会議や勉強会で検討を行い、身体拘束がない職場づくりに努めている。	身体拘束を行わないことはもとより「スピーチロック」の防止に注力している。「ちょっと待って」などの言葉を避け、事前に理由を説明し納得を得るような声掛けが徹底されている。転倒リスクのある利用者に対しても、行動を制限するのではなく、職員による見守りや環境整備で対応されている。		
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	年間研修の中に虐待についての勉強会を必須項目にしており職員が学ぶ機会を設けている。不定期ではあるが職員が利用者様にケアについて不満等ないか聞き取る機会があり、早期に虐待や不適切ケアを行っていないかわかるように対応している。			

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在、成年後見制度を利用されている入居者様はいない。成年後見人制度に対して知識が不十分な職員が多いので、今後理解を深めたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時等に十分に説明している。ご家族から、疑問があった場合は、都度お話を伺い、疑問点についてご説明させていただき理解・納得を得られるよう努めている		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご面会時には、管理者やケアマネージャより近況の様子をタブレットの写真と併せて説明しており、ご家族様の意見等をサービスに反映できるように努めている。	利用者の羞恥心に配慮し、入浴介助を女性職員が担当してほしいといった家族の意向が運営に反映されている。また、散歩や歩行の機会を増やしてほしいという要望に対し、フロア内の歩行訓練や個別リハビリの実施に繋げている。タブレット端末で日々の様子を家族へ共有する工夫もなされている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	全ての職員が参加する事は難しいがフロアミーティングの際に提案や意見等を共有し、問題解決を図っている。参加できない職員にも事前に意見を提案してもらえるよう声掛けをしている。	職員会議を毎月開催し、各リーダーやケアマネジャー等から現場の意見を吸い上げる体制が整えられている。一律の介助ではなく、利用者の状態に合わせた柔軟なケアの変更が議論されている。若年性認知症の方の役割づくりなど、職員の提案に基づくボトムアップによる改善が日々実践されている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者も定期的に施設内に訪問し、一緒に勤務に入るなど各職員との交流や現状を把握できるように努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	入社時には研修を必須としており、不定期ではあるが職員には外部研修参加を促す取り組みをしている。働きながらのトレーニングは明確な職員の階層ごとの手順段取りが準備できておらず今後の課題となる。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	一般職員間での他事業所との交流は、開設時に他事業所に研修訪問し交流を図った。今後は隣接する同法人内や他事業所との交流を含めてサービスの質の向上に取り組みたい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前にはご本人様・ご家族様に見学をしていただき、要望や疑問点は随時相談出来る体制がとれている。また、実地調査を行い入居前の施設や病院等、入居者の状況をしっかり引き継げるよう情報収集に努めている。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	事前に実地調査などの機会に現状の困りごとや相談事を聞き取りしている。また契約時の際も今後のグループホームでの生活の疑問点や要望等を聞き取りしながら、出来るだけご家族のニーズを汲み取れるよう努力している。			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	サービス導入前に、書面での情報や関係者からの情報をもとにご本人、家族のニーズの把握に努めている。得た情報は申し送りを行い職員間で情報共有している。サービス導入前にご本人やご家族と関係作りができずに入居された方もいるので、関係作りの工夫が今後の課題。			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	洗濯物たたみや食器洗い等の家事を役割分担し、生活の中で個々の能力が発揮できるよう支援している。作業後は必ず感謝や労いの言葉を掛け、お互いを敬い合う関係作りに努めている。			
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族来園時には、写真等を提示しながら近況報告をさせて頂き、情報共有と信頼関係の構築に努めている。また、運営推進会議等に参加して頂き、グループホームでの生活をより深く知って頂く機会を設けている。			
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	感染症の流行や緊急時以外に面会の制限を作らず、ご家族やご友人等自由に交流ができる機会を設けている。緊急時や感染症の際にはリモートで面会を導入する等、対面以外での面会方法も今後検討していく必要がある。	入所前からの友人や以前の職場仲間との面会を、家族の確認を経て継続できるよう支援している。また、キリスト教の信仰を持つ利用者に対しては、家族の付き添いによる日曜日の礼拝参加など、馴染みの場との繋がりが維持されている。利用者の生活背景を尊重した社会関係の継続が図られている。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者は1日の大半をフロアで過ごしているので、座席の配置を考慮したり、家事を分担したりする等、1人ひとりのニーズに出来るだけ対応出来るよう努めている。			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去を検討する場合には、その後の暮らしや方向性も含め、十分な話し合いが出来るよう努める。病院に入院された際には、お見舞いや面会等に足を運ぶなど、サービス終了後もより良い関係作りができるよう支援していく必要がある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	生活動作において、本人の言葉、表情から意思や意向を把握するよう努めている。意思疎通が難しい方は表情や視線から意向を汲み取ったり、ご家族の言葉を残す等、なるべく本人そのままの言葉や様子等を日常の記録に残せるようにしている。	入居前の生活歴を踏まえ、お茶を好む人には緑茶に合う茶碗を用意し満足した表情が見られた。被害意識のある人には職員が本人の前で施設することで安心感を得ている。言葉での表現が難しい人には複数の選択肢を用意し、その中から選んでもらうことで意思を確認するなど、個々の思いや意向を丁寧に把握している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前の実地調査や契約時に、本人やご家族、居宅、病院、施設等の担当ケアマネージャーに生活歴や趣味などの聞き取りを行うと共に、日々の暮らしの中から情報収集ができるよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	入居者の身体・精神状況は日々変化しやすいので、その瞬間や状況を詳しく記録に残している。必要な際に適切な医療が受けられる等、24時間を通して職員間の申し送り等で情報共有がなされている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月開催しているミーティングや毎日の申し送りを通して、なるべく多くの職員から情報や意見を収集している。また定期的な担当者会議の開催からご家族や医療チーム等の情報を収集し、ケアプランに反映させている。意思疎通が困難な入居者の意向をどのようにケアプランに反映させるかが今後の課題である。	長く独居生活を続けていた人には、入居後は可能な範囲で役割を担ってもらい集団生活に慣れるようケアプランに位置付けている。発語はあるが意味の理解が難しく会話が成り立ちにくい人には、家族から得た情報や要望を反映した計画を立て、個々に応じた支援を進めている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	都度職員がタブレットを使用し、入居者の状況を記録、閲覧できるようになっている。また、職員全員が出勤時に申し送りノートを開覧し日々入居者の状況を確認している。職員間で日々共有した情報をモニタリングの際に評価し介護計画の見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	『地域の認知症ケアの拠点』として、認知症の困りごとに対しては関わっていききたい。認知症と思しき方の保護にも協力した。急を要する入所に対応するため新たにショートステイの認可を取得し、利用していただくこともできた。引き続き看取り期に近い方は面会は制限しないなどし、安心した環境づくりに力を入れている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍で買い物や外食もできなくなり、地域資源の把握が十分ではない。「認知症」「施設」ということで、閉鎖的なイメージがある。もっと、地域とかかわらなくてはいけない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	施設が提携している訪問内科の医療機関の他に、眼科等はご家族様の希望する病院に受診して頂くなど対応している。施設内での往診の際は職員から診察して頂きたい内容やバイタル等の推移など事前に書類を作成しており医療に利用者様の状態を正確に伝えられるよう対応している。	利用者全員が主治医による月2回の訪問診療を受けている。内科以外では入居前から通う眼科に家族が同行する人がいる一方、車いすを利用し家族の同行が難しい人には職員が付き添って受診している。訪問看護師の週1回の健康チェックや主治医との連携、薬局による週1回の薬配送など医療支援体制が整っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	入居者様の日々の様子や体調の変化などケアリーダーを中心に情報を集め、訪問看護の際に看護師に報告相談しており訪問看護から医師へと医療職間でも情報共有をさせていただいている、また臨時に確認したい内容なども電話にて相談している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	開設以降入院する案件は発生していないが、入居の際に病院からの紹介で入所に至った利用者もあり、病院の相談員の方とは実地調査等を通して関係性を築けている方もいる。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所時に延命治療等の終末期のご意向の確認は行っている。地域の関係者を含めたチームでの支援は今のところ具体的に策定できていない。	入所時に延命治療を含む終末期の意向を確認し、状態に変化が見られた際には家族の意向を再度確認している。重度化が進むと医師に相談し指示を受け、家族同席のもと説明が行われホームでの看取り体制へ移行する。年間計画に基づく看取り研修も独自資料を用いて実施されている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の対応については共有フロアに各対応ごとのマニュアルを設置している。個々の職員の実践力が把握できていないのが今後の早急の課題。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災訓練は定期的に行っているが、最近の訓練では、『日中の火災』を想定した訓練が中心となっている。入社後、日が浅い職員は、まだ夜間の火災や地震、水害を想定した訓練に参加したことがない職員もいる。様々な状況に応じた訓練の実施が課題である。	昨年5月の設立のため災害訓練は未実施であるが、来年度は5月または10月に消防署立ち合いの火災訓練を予定している。利用者参加については隣接する松戸の園と同様の形を想定している。BCP訓練は法人内の松戸の園、栄の園と3施設合同で実施し、避難訓練や物資在庫の確認などを行っている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	行う一つ一つのケアにおいて、どこで何をおこなうかをはっきりさせた声掛けをする。本人の合意と納得を得られるように、安心できる声掛けの配慮を心掛けている。利用者様の言葉を肯定的にとらえ、否定的に聞こえる言葉を使わないようにする。	目線を合わせた対話を基本とし、相手が安心できる関わりを大切にしている。トイレであっても「どうしましたか」と丁寧に声をかけ、相手の気持ちをくみ取る姿勢を重視している。利用者を人生の先輩として尊重し、否定的な言葉を避け肯定的に受け止めることで、その人の尊厳を守る配慮が徹底されている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	気持ちを言葉に表せる方の意見を聞くために、個人での聞き取りを行ったり、行っているケアやレクに対する意見を聞いたりしている。また、自己表現が難しい方に対しては、本人の表情やご家族の意向などからできる限り理解したい。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者様全員がご自身のペースで生活しているとはいえない。こちらが提示する選択肢から選んでいただくことが多いように感じる。しかしその中でも、利用者様がどのように過ごしたいかという思いを汲み取ろうとして介護するように心掛けている。結果を急がせたりせず、「ゆっくりどうぞ」などの落ち着ける声かけをするようにし、施設の業務が多く、忙しい雰囲気になっているときでも、極力、ゆっくりとした雰囲気を作るようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	ご自身の意思をはっきりいえる方には支援を行っている。自身の洋服にこだわりのある方もいらっしゃるので、自分で選んで着ることができるようにしている。そのうえで清潔を保つことができるように声掛けをし、洗濯のタイミングなどを納得していただけるよう心掛けている。また、温度変化にしっかり対応した洋服を着て快適に過ごせるような声掛けをするようにしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の際の、盛り付けや食器洗いを手伝って頂いている。感染対策と生活リハビリのバランスが難しい。また、食器洗いをしたい利用者様が多い時に、したいのにできない方が出てきてしまうこともあるが、日ごとに交代し行っている。身体機能が落ちて食事作りができない利用者様には時々食事前にメニューを紹介し、喜んでいただいている。	食事時の手伝いを生活リハビリの一環と捉え、集団生活の中で準備や後片付けを共に行っている。噛む力が弱い人には刻み食を提供し、原形が分かりにくいいため事前にメニュー説明を行い理解を促している。スプーンの改造など食べやすさへの工夫もみられ、通常食以外に海鮮丼やたこ焼きづくりを楽しむ時間も設けている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事、水分、排泄は相互作用があるものなので、24時間チェックし、一人ひとりにあった支援を行っている。医療と連携し、その方の状態に合わせた食事形態やとろみの濃さで提供している。また、一人ひとりの水分量を把握し、足りない時は声掛けをしつつその方の好む飲み物を提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	訪問歯科と情報交換をし、指導を仰ぎながら、個々の状態に合わせた口腔ケアを毎食後に行っている。車椅子の方も、洗面台へ行き、口腔ケアの意識を持っていただけるよう支援している。口内炎や虫歯は食事量の減少などにつながる為、食事量が減ったときなどは口腔内を確認させていただいている。また、週に1回訪問歯科による口腔リハビリも行っている。入れ歯を使用している方は毎晩預かり入れ歯洗浄剤で清潔を保っている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を用い個別の時間を把握し、トイレ誘導で、尿失禁を防いでいる。精神面の不安から、何度もトイレへ行かれる方への支援は気持ち尊重し、できるだけ付き添っている。自力での排泄が可能方へは、最後まで、トイレ誘導の支援を行っている。排泄の中にもいろいろな行為があるので、それらをご自身でできるように促すのも、排泄の自立と思い、支援している。羞恥心に配慮し、外から見えてしまわないように、また安全確認できる距離で見守るようにしている。	共有タブレットに排泄記録を入力し、職員はデータを確認しながら適切なトイレ誘導を行っている。日々の自立支援の積み重ねにより個々に合った誘導が可能となり、生活リズムが安定し夜間排泄もコントロールしやすくなっている。食事前の体操や腹部マッサージ、ヨーグルト提供など排泄を促す工夫も取り入れている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食事は、バランスの考えられたものを注文し提供している。毎日体操に参加していただいている。医療との協力により、適宜、必要な方には薬を処方していただいている。午前中のおやつにはヨーグルトを提供するなど、薬だけに頼らない支援も心がけている。便秘の及ぼす影響を十分に理解しているとはいえないが、極力体を動かして頂くようにしている。散歩や個別リハビリでの歩行訓練を声をかけて行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴は個室で職員がお誘いから介助から自席の案内まで一人が担当し、心地よい雰囲気を作るようにしている。毎週、外出や往診の日程に応じて入浴日を作成しているが、体調により臨機応変に変更し、おこなっている。また、聞き取りを行い、異性の介助者が嫌な方には、同性の介助者が担当するようにしている。	ゆっくり入浴できるよう一日3人までとし、一人当たり30～60分の時間を確保している。季節感を味わえるようゆず湯などの工夫を行い、入浴を楽しむ時間を大切にしている。入浴前には血圧や体温を測定し、健康状態を確認したうえで安全に入浴できるよう配慮している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	居室の温度調整や採光などに注意している。また、馴染みの家具や音楽を取り入れるなどして、居心地の良い空間作りに努めている。日中の時間に自ら休むといわれる方もいるが、訴えのない方はその日の体調を見て、必要であれば臥床時間を作っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	医療職や薬剤師と情報交換し、用法用量は把握しているが、職員全員が目的を把握しているかはわからない。既往歴や現病歴を把握し、なぜこの薬を飲んでいるかを周知し理解を深めることが大切である。また内服薬の変更があったときは状態の変化に素早く対応できるようにするため、皆で情報共有できるように申し送りやノートを使って、情報を伝えている服薬方法の徹底を行っている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりできることをホームの中で役割を持っておこなって頂けるように、食事作り、掃除など、出来ることはして頂いている。特に「生き甲斐づくり」として自分が必要とされる場所があること、人とのふれあい、について支援していきたい。一人ひとりの性格に沿った声掛けをし、ご本人様の意向に沿った生活が出来るよう心がけている。また、体を動かしたり、みんなで歌を歌うレクなどで楽しんでいただけるよう心がけている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	日常的に一人ひとりに声掛けをして、希望があった際には外部と接触しない範囲で、職員と散歩に行ったり、ごみ捨てに行ったりなどの外出をし、気分転換になるように努めている。また、ご家族との外出も行っている。	平均介護度2.2と比較的軽度の利用者が多く、午後には交代でホーム周辺を散歩しているほか、時には江戸川の土手を歩くこともある。職員が隣接する松戸の園へ出向く際には利用者が同行し、交流の場が生まれている。家族の付き添いで日曜礼拝に参加する人もおり、外出が日々の楽しみとなっている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご自身で金銭の管理をしている方はいない。買い物支援もあまり行えていないのが現状である。近くのコンビニまで散歩し、そこで支払いをおこなったり、施設の外に出なくても、移動パンなどの買い物はできるので、ご自身で買い物できるように支援することはできるのではないかと。今後の課題である。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	自立度が高い方は携帯電話を持っており、ご自身の好きな時にご家族や友人と電話で話している。手紙を書かれている方は今はいらっしゃらない。字を書ける方は多いので、レクの中で、ご家族に手紙を書いたりするのはいいと思う。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	リビングにはカレンダーや季節の植物、また利用者様がレクで作った工作を飾っている。特に最近では、換気が不可欠なので、食後の定期的な換気や空気清浄機を使った換気を行っている。大きな窓のカーテンを開けて、外の季節の木々を見たりすることで心地よく季節を感じることができるよう心掛けています。	ホールの隅には利用者が使っていたオルガンが置かれ、時折その音色が空間を和ませている。利用者が以前作ったパッチワークは部屋の中や前に飾られ、目を引く存在となっている。ロビーには節分やひな祭りなど季節の飾りが掛けられ、職員が毎週持参する花も彩りを添えている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	居室にいつでも戻れるように、居室を整理整頓したり、自由に座れる別席を用意することで、自分の居たい場所にいつでも居れるように努めている。また、気分をリフレッシュする時間として利用者様と二人で散歩する時を設けている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居前にご自宅にお伺いし、ベッドの配置など確認し、ご相談の上、家具の配置も工夫している。極力、ご本人様が安心されるように、馴染みの家具や小物を持ってきていただいている。居室内の清潔保持の為居室担当職員が手伝い整理整頓を行っている	家庭の延長として使い慣れた馴染みの物を持ち込めるようにしており、居室がその人らしく過ごせる場となっている。多くはホールで過ごすか、自室で横になる人の姿も見られる。転倒防止のため家族の了解を得て赤外線センサーマットを敷く部屋もあり、安全面への配慮が行われている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	浴室やトイレには手すりを多く設置し、極力自立して行う事が出来るよう、工夫している。施設内動線には手すりは少なく、現在は手引きや杖を使った歩行をいただいている。利用者様の必要に合わせた設置も考える必要があるだろう。		